

【研究ノート】

大学教育の目標とその達成(2)：教育方法と制度のあり方*

岡部光明

【概要】

大学教育の目標は、日本語力、インテグリティ、向上心の三点に集約できることを別稿（岡部：2018）で指摘した。本稿は、リベラルアーツ教育という観点からその発想を評価するとともに、そうした目標を達成するにはどのような学習方法と制度的な仕組みが相応しいかにつき、国内外の3つの大学における教育のあり方に照らして考察した。

その結果、(1) 上記3目標はリベラルアーツ教育という観点にも合致している、(2) その教育効果を挙げるには「講義+少人数クラス（ゼミや研究会）」という制度がふさわしく、この点を含めて米プリンストン大学の学部教育に学ぶべきことが多い、(3) 大学教育においては仲間と共に学ぶという環境（人間的きずなの形成）が在学時だけでなく卒業後の人生にとっても大切である、(4) 日本の大学生の学習時間はアメリカ等の大学生に比べて著しく少ないが、その理由は大学教育が本来どうあるべきかが日本では正面から問われることがなかったことを反映しているので、いまその根本的な議論が必要である、などを主張した。

キーワード： リベラルアーツ教育、審美眼、人的きずな、プリンストン大学、オックスフォード大学、慶應義塾大学SFC

* 本稿は「ビジョン研究会」（座長 久水宏之氏）の第50期第1回会合（2018年10月17日、於日本プレスセンタービル大会議室、東京都中央区）において発表した内容を大幅に拡充して論文としたものである。座長をはじめ、研究会参加者（客員教授などの資格で大学に関係される方も少なくない）から有益なご意見をいただいた。本稿は、読み易くするため文面を「です・ます」調で統一した。本稿は明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト<<https://meigaku.repo.nii.ac.jp/>>から全文ダウンロード可能である。なお、大学生が学ぶべきことは、著者の体験を踏まえると3つに集約できること、そしてそれは近年の学問研究の動向とも整合的といえることは、別稿（岡部 2018）を参照されたい。

はじめに—本稿の視点

前回の報告「大学教育の目標とその達成(1)：体験論と学問的論拠」(岡部 2018)の要旨は三点でした。

すなわち(1)大学生は三つの顔(若き研究者、良い市民、一人の人間)を持つので、その全てを豊かにする教育が必要である。(2)それを意識するならば、大学教育の目的は「日本語力、インテグリティ、向上心」の三つに集約できる。(3)このことは私の教育者としての体験、学生の反応、さらに教育論や心理学の視点に照らして妥当性があると考えられる。これらが結論でした。

以上を受けて今回は、(1)教養教育、リベラルアーツ教育というよく出てくる言葉に照らすとどう理解できるのか、(2)大学教育の目標を達成するにはどのようなメソッドと制度的な仕組みが相応しいのか、(3)私が直接経験した国内外の3つの大学(米プリンストン大学、英オックスフォード大学、慶応大学 SFC・湘南藤沢キャンパス)における教育の実体とそこでの学生の動向、を述べることにします。そして最後に(4)日本の大学制度の方向を議論する場合に欠かせない幾つかの論点を指摘したいと思います。

私はこれまでに大学教育について6冊の本を書きました(岡部 2000、2002b、2006、2009、2011a、2013：図表1)。これらは、その時々学生に伝えたい自分の思いや発見、あるいは確信したことなどを綴ったものであり、何ら体系的なものではありませんが、本日はそれらをもとにお話をし、議論のたたき台を提供することにいたします。

図表1 大学教育に関する6冊の本



1. 教養教育、リベラルアーツ

まず、大学教育を語る場合によく出てくる「教養」、あるいは「教養教育」ないし「リベラルアーツ教育」ということについて、多少概念整理をしておきます。

(1) 教養ということ

かつて「教養がある」とは、知識が豊富なこと、すなわち物知りや博識とほぼ同義語として使われていました。しかし、現在その意味で使うことは不適切になっています。何故なら、必要な情報や知識はインターネットで検索すればピンポイントで瞬時に、そして多量に入手できるからです。

だから教養の現代的意味は、二つあると思います。一つは、とくに人文系の学問（古典、歴史、芸術、文学、思想等）に対する幅広い造詣があることです。そしてもう一つは、これが重要な点ですが、一つ目の点はその人の品位や人格、物事に対する理解力や創造力に結び付いていることだと考えるのが妥当ではないでしょうか。このように考えると、教養と言う言葉は依然として素晴らしい言葉だと思います。この点、この研究会の皆さんは本当に「教養がおありになる」と常々感服しています。だからこの会に参加することによって色々なことが学べ、大きな刺激にもなる、というのが私の率直な感想であり、だからこそ毎回出席している次第です。

こうした教養は旧制高校（1950年まで存在した日本の高等教育機関）において重視され、それが日本のリーダーにふさわしい教育を与えた、という言説を年配の方から聞くことが少なくありません。そこで、唐突ですが、旧制高校の学生歌と寮歌を例にとり、教養を構成する要素としてどんなものがあるのかを抽出してみたい。

まず「デカンショ節♪」です。それは「デ[カルト]、カン[ト]、ショ[一ペンハウエル]で半年過ごす～」と歌い出され、深遠な哲学を学ぶことが教養であることが示唆されています。そしてこれに続き「あとの半年は～寝て暮らす」という表現によってそれが時間的な制約がなく学べる、という意味が含まれている気がします。

もう一つは、旧制一高の「嗚呼玉杯に花うけて♪」です。私も今から55年ほど前の学生時代にコンパで良く歌っていたものです。その歌詞の一番の終わりに「五寮の健児意気高し」とありますが、これは学生にとって学寮の大切さ、共同で学ぶことの大切さを示唆していると思います。また歌詞二番の「清き心の益荒男が剣と筆とを取り持ちて～」において清き心というのは、前回お話した「インテグリティ」

であり、剣というのは「生き抜く力」、そして筆は「学力」であり、これら三つを備えた益荒男が望ましい学生としてイメージされていたと解釈できるのではないでしょう。つまりこれらの学生歌や寮歌には、前回述べた三つの目標（学力、インテグリティ、生き抜く力）が歌われており、さらに学修や人間関係の形成にとって学寮が重要な役割を果たすことが示唆されていると思います。

(2) リベラルアーツについて

次に、リベラルアーツについてです。日本語では「自由学芸」と直訳的に表現される場合がある一方、「教養」と同じ意味に使われることもあり、なかなかフォーカスしにくい概念です。このため、まずその語源から辿る必要があります。

西洋古代においてリベラルアーツとは、自由 (liberal) な人、つまり奴隷でない一般市民が身につけるべき技量 (arts) のことを意味していました。12 世紀に描かれた図 (図表 2) においては、真ん中に哲学があり、その周りに七つの自由学芸 (リベラルアーツ) の科目、すなわち文法学、倫理学、修辞学、算術、幾何学、音楽理論、天文学が配置されています。

図表 2 Liberal Arts (12 世紀の版画)



(出所) https://en.wikipedia.org/wiki/Liberal_arts_education

その後いろいろな変遷を経て現在、北米においては概ねこのような学問群がリベラルアーツと称されています (図表 3 の左端の 2 つの欄)。すなわち、そこではアーツと総称される人文系の学問 (哲学、思想、歴史、演劇など) と、サイエンスと称される自然科学系および社会科学系の学問の両方が含まれ、これが大学の学部課程

を形成しています。このため、米国大学の学部課程は通常“school of arts and sciences”と言う名称（日本流に言うと文系と理系が合わさった文理学部）で呼ばれています（図表3の中央部）。日本でも一部の大学では学部4年間を通して教養学部の制度を採っている大学がありますが、それはこうした米国型の学部教育と同じ発想によるものです。

このようなリベラルアーツ（科目）とは対照的なものが、各種専門職科目（professional subjects）や技術的科目（technical subjects）です。すなわち医学、法律学、建築学、会計学、商学、看護学等であり、これらはリベラルアーツの概念に含まないというのが一般的な理解になっています。つまりリベラルアーツは「非専門職的」そして「非実利的」な科目群のことだ（猪木 2009 : 84 ページ）と特徴づけることができます。

ちなみに、英国の *Oxford Dictionary* ではリベラルアーツを「文学、哲学、数学、社会科学、自然科学などの大学教育の科目（専門職科目や技術的科目とは対照的な履修科目）を指す」と定義しています。また、アメリカ英語を代表する *Webster Dictionary* では、リベラルアーツとは「大学において主として一般的知識を与えるとともに一般的な知的能力（理性や判断力）を育成することを目的とした学修科目（語学、哲学、歴史、文学、科学理論など）であり、専門的ないし職業的な技量を目的とする科目とは対照をなすもの」と規定しています。

つまり、リベラルアーツ（科目群）は、何かを目的とするという視点も含まれる¹ものの、むしろ大学の学部教育課程に与えられた名称になっており、現在では専ら制度的な意味に重点があります。そしてそれは全体として、前回述べたように批判的思考（クリティカル・シンキング）の育成を究極的に目的とするもの²、と理解してよいと思います。いずれにせよ、教養、教養教育、リベラルアーツ教育という表現は論者によって多様な意味をもっており、その用語を用いる場合には、まずそれを定義する必要があること（そうでなければ建設的な議論になりにくいこと）をここで強調しておきたいと思います。

¹ 現代のリベラルアーツは、三要因すなわち (1) 市民性の啓蒙（公共心の涵養）、(2) 品格の陶冶（人格形成）、(3) 文理融合による俯瞰力の形成、から構成されるとする見解もある（今田 2018 : 24-30 ページ）。ただ、大学教育の観点からみると、その列挙順序や具体性に議論の余地があるものの、これら三つは概ね筆者が主張する大学教育の三目標、すなわちそれぞれ、社会力（インテグリティ）、向上心、日本語力、に対応していると考えられることもできる。

² 岡部（2018）5章（1）を参照。

図表3 リベラルアーツ（自由学芸）：その意義と制度の対応

西洋古代	現在（北米）	学部・大学院	博士学位の名称	大学における履修制度
<p>■ 哲学</p> <p>■ 自由学芸（7科目）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 文法学 (grammar) 2. 論理学 (logic) 3. 修辞学 (rhetoric) 4. 算術 (arithmetic) 5. 幾何学 (geometry) 6. 音楽理論 (theory of music) 7. 天文学 (astronomy) 	<ul style="list-style-type: none"> • 文学 (letters) • 哲学 • 数学 • 社会科学 • 自然科学 など <p>(専門職科目や技術的科目とは対照的な科目である点に特徴)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Arts * • Sciences ** 	<ul style="list-style-type: none"> • 博士 (Doctor of Philosophy, Ph.D.) 	<ul style="list-style-type: none"> • School of Arts and Sciences (北米では学部課程4年間。文理学部) • 日本では教養学部(教養課程。2年間)
		<ul style="list-style-type: none"> • 専門職科目 (Professional subjects: 医学、法学、会計学、建築学、教育学など)。 	<ul style="list-style-type: none"> • 医学博士 (Doctor of Medicine: M.D.)、法学博士 (Doctor of Laws: LL.D., J.D.) など。 	<ul style="list-style-type: none"> • 専門職大学院

* 文学、音楽、哲学、宗教学ほか。

** 下記二つの大別可能：

社会科学＝人類学、地理学、歴史学、言語学、政治学、心理学、社会学、経済学ほか。

自然科学＝生物学、化学、物理学、天文学、地球科学ほか。

(出典) Wikipedia (Liberal arts education)、Oxford Dictionary、猪木 (2009) などを踏まえて作成。

リベラルアーツがこのように幅広い意味を持つことを考えると、私は自分流の定義を提案してみたくになります。すなわち、リベラルアーツとは、伝統的な意味と多少異なりますが「特定の専門領域に縛られることなくさまざまな知識と知的技能を自由に（リベラルに）用いつつ、問題を解決していく技量（アーツ）である」と。ちなみに、後述する慶応大学 SFC の学部教育は、まさにこのようなものになっています。つまり、科学・技術が加速度的に進展する現代社会を学問の対象とする場合、「タコツボ的な専門知」だけでは扱い得ない多くの諸問題が生み出されています。このため、この理解の仕方は、専門主義を超えた「統合知」あるいは「新しい教養知」とでも呼ばれ得るものがいま要求されているとする見解³とも整合的だと考えます。

(3) リベラルアーツ教育の各種制度

大学の学部教育はたいてい4年間です（英国やドイツでは3年の場合もあります）が、そこでのリベラルアーツ教育は、それぞれの国や大学独自の歴史的経緯などを反映してかなり多様です。またリベラルアーツ（教養課程）は、日本独自の展開、発展をしている面もあります。そこで、これらを整理すると、大学の学部4年間の学修システムには四つの類型があるという理解が可能です（[図表4](#)）。

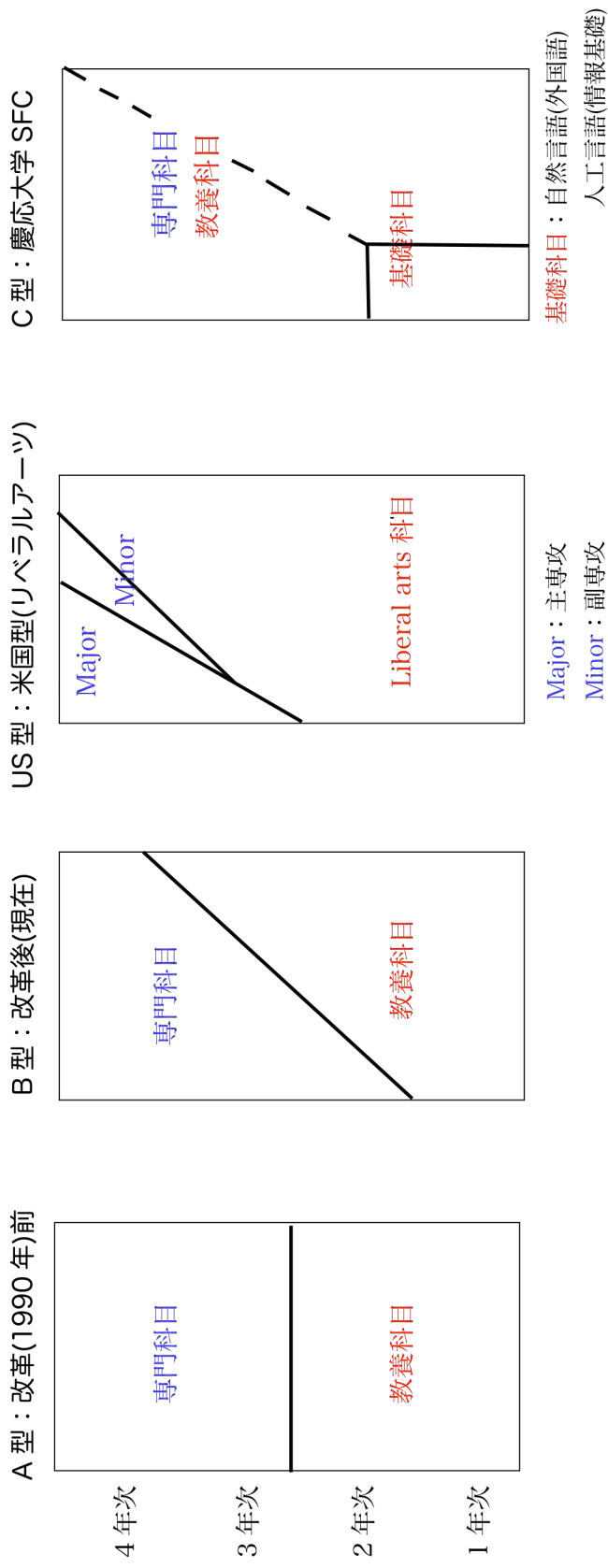
【A型】 同図の一番左のタイプ（A型）は、長年親しんできた日本の大学の姿です。最初の2年間で「教養課程」（教養部）、次の2年間で「専門課程」というかたちをとっています。しかし1991年以降、文部科学省の政策変更により教養課程は廃止・解体され、従来のその組織は総合人間学部、総合科学部、国際教養学部、教養教育センターなどに衣替えされて現在に至っています。

【B型】 改革後の現在の履修システムは、B型として示したように、専門教育が2年次まで降りてきた「くさび型」になっています。このように変更されたのは、教養教育は実りが乏しいという批判が多かったため専門科目を2年次まで下す一方、教養科目を実質的に減らしたためです。そしてこれが現在ではほとんどの大学において標準形になっています。

【US型】 このような日本の学部課程に対して、アメリカでは同図のUS型のような形になっていると理解できます。その特徴は、前述したように4年間を通して

³ 山脇（2018：序文 i-ii ページ）。

図表4 リベラルアーツ科目と専門科目の履修方式



(注) 筆者作成。

リベラルアーツ教育ですが、一方で主専攻 (major)⁴と副専攻 (minor) という制度を設け、ある程度の専門性も経験させるというメリハリをつけているのが特徴です。日本でもこの型を採用している例があります。例えば、東京大学の教養学部教養学科では、学生が4年間駒場の教養学部で過ごすほか、国際基督教大学教養学部、津田塾大学学芸学部等でも学生は4年間を通して事実上、教養学部にて在籍します。ただ、いずれの場合も在学後期(3~4年次)には一定の専門領域への集中学修を要請しています。例えば、国際基督教大学の場合、教養学部は人文学・社会科学・自然科学の3つを包摂しているので、理系・文系いずれ分野でも集中学修が可能になっているのが特徴です。その点で米国型リベラルアーツに範をとっています⁵。

ただ、4年制の教養学部のうち2000年以降に設置された「国際教養学部」(早稲田大、国際教養大、法政大など)では、理系科目が設置されていないケースも少なくありません。このため、専門性の弱さを指摘する声がある一方、本来の学部教育(理系科目も含めた本来の教養教育)の実効性が今後問われる懸念があることも指摘されています。

【C型】最後のC型は、多分野横断的(あるいは学際的)な学部教育を目指す慶応大学SFC(湘南藤沢キャンパス)総合政策学部のケースです。SFCでは、4年制の学部において「問題発見・解決型」の教育方式を標榜しています。学生が「問題を自分で発見し、その処方箋(政策対応)を書く」ことを教育の理念としており、従って教養科目、専門科目の区別はなく、またどの科目も履修年次の制約がありません。これはリベラルアーツ型教育の一つの類型、あるいはその拡張型と解釈することができます。こうした方式は日本独自の学部教育として慶応が1990年に導入したものです⁶。

SFCには二つの学部(総合政策学部、環境情報学部)がありますが、学生はいずれの学部にも所属しても、このキャンパスのどの学部の科目を学修するかについて制約が全くないほか、教授会も両学部合同の会議が一つ設置されているだけです。研究領域もそうした学際的な思想で統一されており、二つの学部の上に位置する大学院も「政策・メディア研究科」という一つの統合体になっています。

⁴ 主専攻の学習期間は一般に在学後期の2年間であり、これは専門学修(specialization)または集中学修(concentration)とも称される。

⁵ 絹川(2002)3-4ページ。

⁶ 総合政策学部という名称の学部設置は慶応大学SFCがその嚆矢であるが、現在ではこの名称を持つ学部が20を超える大学において設置されている。

(4) 慶応大学 SFC について

慶応大学 SFC は、湘南の丘陵地帯を切り拓いて新たなキャンパスとして 1990 年に創設されました (図表 5)。そこでは、上述したように学部教育に新しい思想を導入しただけでなく、従来日本の大学にはなかった各種の制度 (AO 入試、授業シラバス、学生による授業評価、教員のオフィス・アワー等) も導入したので、日本の大学革新のさきがけとして当初から注目されてきました。幸い私は 1994 年にオーストラリアの大学から SFC に着任し、そこで 14 年間勤務する機会を得たので、以下 SFC の紹介と若干の印象を述べることにします。

AO 入試や授業シラバスといった各種の制度は、当時の日本では斬新なものでしたが、米国の大学では従来普通にみられたものに過ぎず、現在あえて話題にするまでもありません (授業シラバスの一例は本稿末尾の [付表] を参照)。しかし、キャンパス全体として学際的アプローチを標榜するとともに、学部教育でそれを重視するという発想は現在でも斬新性があるといえます。そこで、この考え方を説明するために、慶応大学三田キャンパスの経済学部と対比してみます。

図表 5 慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス (SFC)

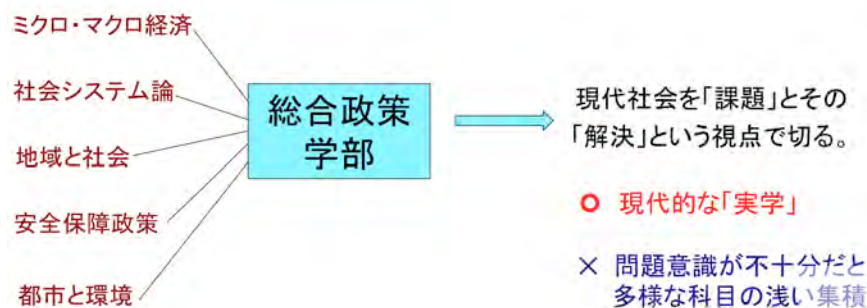


経済学部は、人間社会を経済学の視点から理解することを特徴としています (図表 6)。その長所は深く切ることができることですが、一方、その切り口は社会の一つの側面でしかないという限界があります。これに対して総合政策学部では、多様な科目 (マクロ・ミクロ経済学、安全保障論、都市と環境論等) が提供されており、それらを自由に履修できます (図表 7)。それによって現代社会の問題を発見し、解決策を探るといのが学修および研究の視点です。「現代的な実学」ということができます。ただ、問題意識が不十分だと、学生は「いろいろな科目を沢山勉強しました」ということで終わるリスクが少なくありません。

図表6 社会の理解(1) : 経済学部の場合



図表7 社会の理解(2) : 総合政策学部の場合



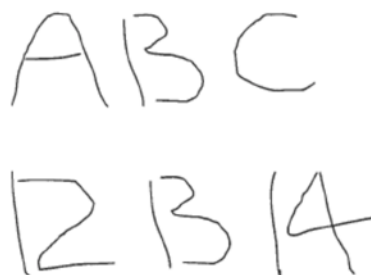
いずれが良いかは、条件次第です。いずれにも得失があります。ただ、学際的研究がなぜ必要かという問題は、比喩的に図表8によって理解できます。上段を見ると、誰もが“ABC”と読みます。一方下段は、たいていの人が“12 13 14”と読むはずですが。しかし、よく見ると真ん中の図柄は上段、下段とも同じものです。現実の一つであっても、ものごとをどのような文脈（コンテキスト）で見ることによってその意味が全く異なるものとなるわけです（文脈効果）。換言すると、社会を的確に理解するためには、学際的接近（interdisciplinary approach）が必要だということです。因みに、この図は、カーネマンというプリンストン大学の心理学者が心理学と経済学の融合領域を拓いたとしてノーベル経済学賞を受賞した時に、その受賞講演で使ったものです。

学際的接近ないし多分野的接近が不可欠な一例として、コーポレート・ガバナンス（企業統治）の例を挙げることができます⁷。コーポレート・ガバナンスのあり方

⁷ ていねいに表現すると、コーポレートガバナンス（企業統括）とは、企業の株主、経営者、従業員、借入銀行など（これらを利害関係者という）の間における相互作用の結果、企業の行動がどのように規律づけられるのか（効率性が維持されるか）に関する仕組みを指す。

は日本経済のいろいろな側面に影響しています (図表 9)。逆に、コーポレート・ガバナンスを研究するうえでは、金融論、労働経済学、経営学、商法など色々な研究分野の視点を援用することによって初めての的確な理解ができるわけです (図表 10)。

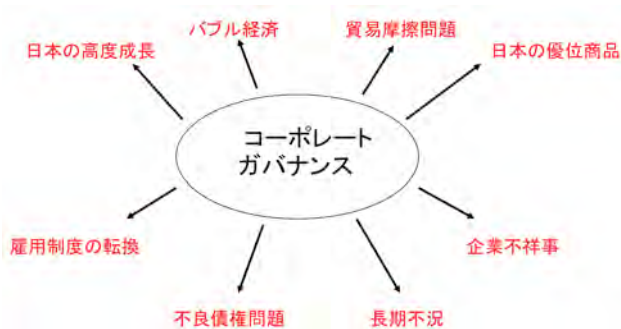
図表 8 学際的研究が必要な理由



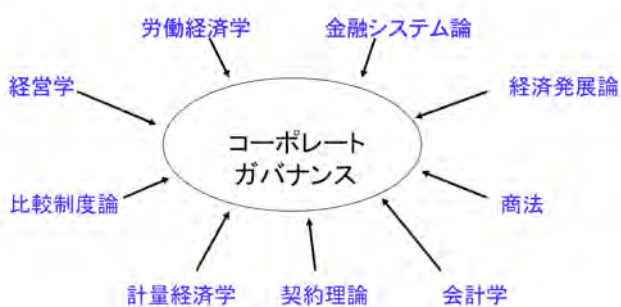
(出典) Kahneman (2003).

研究においてこうした発想を受容し、積極的に推進しようとするのが SFC です。そのおかげで私は自由に学際領域に踏み込むことができ、コーポレート・ガバナンスに関連した日本語書籍 (岡部 2002a、2007) だけでなく英語書籍 (Okabe 2002) も刊行することができました。

図表 9 多くの事象はコーポレート・ガバナンスの視点から説明可能



図表 10 一方、その研究には多くの学問分野の成果利用が不可欠



SFCについての感想

SFC の創設、そしてその後の動向はどう評価できるでしょうか。私の個人的な感想をいうと、キャンパス創設時における関係者や教員そして学生の熱意は現在でも継承されており、また自由な雰囲気や対応の弾力性も引き続き維持されているように思います。そして、これらは他大学には余り見られない貴重な財産になっていると見ています。

例えば、総合政策学部の初代学部長であった加藤寛先生（故人）は「君たちは未来からの留学生」という上手いキャッチフレーズでSFCを表現しておられました（加藤 1992）。また「SFCは万事実験場である」とか、「前例がないから出来ないなどと言うなかれ、前例がないならばいま前例を作ればよい」という発想はなお生きているように見えます。SFCはその創設時、確かに国内外の大学に非常にインパクトを与えました（私も色々な場面で国内外の訪問者にSFCを説明する役割を引き受ける機会がありました）。このため、当時の入試偏差値は突出した高さであり、東京大学の合格を蹴ってSFCに入学した学生もいるほどでしたが、今は慶応内の他学部並み（75～80前後）で落ち着いています。

SFCはどのような学生に向いているのでしょうか。積極性に乏しい学生の場合、「（意味ある）問題をどのように“発見”すればよいかわからない」、「問題を発見してもそれに取り組む分析スキルがまだ身につけていない」、「在学中いろいろなことに手を出したが、結局何をやったかわからない」などといった声が従来から聞かれるのは事実です。積極性を欠く学生にとってはある意味で「厳しい」キャンパスといえます。一方、勉学への熱意と積極性がある学生にとっては活発に勉学と活動ができ、既存学部の場合よりも大きく羽ばたける場所だと思います。これが最大の特徴です。

ただ、より根本的な問題として、アメリカの大学関係者から聞かれる一つの質問があります。それは「『問題発見・解決型』教育は、理念としては素晴らしい。しかし、それは大学院レベルで初めて可能なことあり、学部レベルでは元来無理ではないのか」という指摘です。これに関しては様々な議論ないしSFCの実績評価が可能であり、SFC関係者を含め大学関係者の見解はまだ完全に収斂していないように思います。

(5) 学部教育のエッセンス

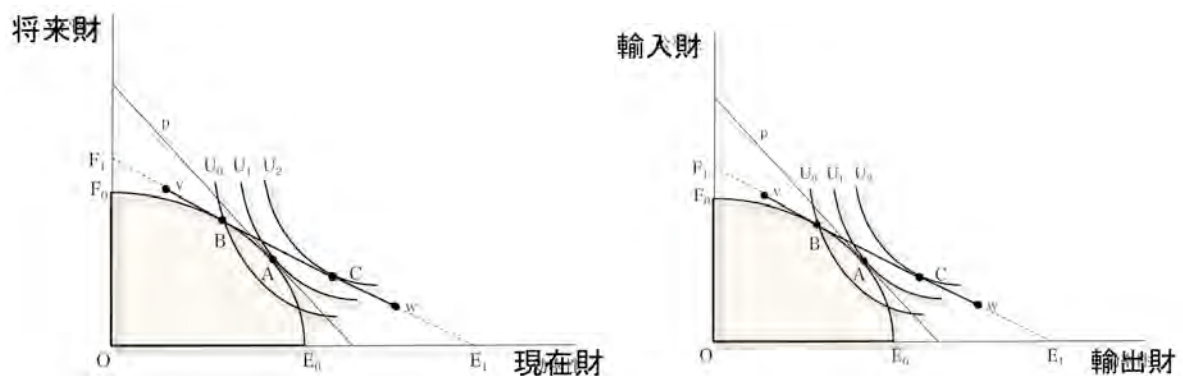
大学での教育や研究において大切な要素ないし側面は何でしょうか。ここでは私の経験から二つの具体的なことを指摘しておきます。一つは美しさを理解する感性、もう一つは、知的技能を体得するうえでの実地体験の重要性です。

美しさ

第一は、学問領域を問わず「美しさ」が一つの重要な基準になること、そして学修によってそのセンスを修得すること（審美眼）が大切なことです。真理は単純で美しい。「単純さは真理を現している場合が多く、また美の基準でもある」と述べたアメリカの研究者⁸もいます。美しい真理の発見は深い喜びを与えます。だから、美的センスを磨くことは、最も深い意味において大学教育が目指すべきことだと私は思っています。

例えば、一般性のある命題（多くのことを同一論理で説明可能な命題）ないし理論は、単純で美しい場合がたくさんあります。その具体的な例として、金融理論と貿易理論の類似性があります。金融取引と貿易取引は全く別ものに思えます。しかし、取引の対象物は異なるものの“交換取引”という点で両者は本質的に同じ現象と理解できます。つまり金融取引は「現在財と将来財の交換取引」であり、国際貿易は「自国財と他国財の交換取引」です。そして、交換することによって交換主体は（詳細な説明は省きますが）両方とも満足度が向上する。だから、同一理論モデルを適用してそのプロセスと結末を理解できるわけです（図表 11）⁹。理論には美しさがあります。

図表 11 貿易理論と金融理論の類似性



⁸ アメリカの生化学者マーロン・ホーランド（1921-2009）。

⁹ これについては、岡部（1999：12-13 ページ）を参照。

もう一つの例として、やや技術的な話になりますが、国際貿易論における「マーシャル＝ラーナー条件」は一般化が可能であり、それを美しいかたちで示すことができることを挙げておきます。

釈迦に説法になりますが、円高になると日本では輸出が減って輸入が増えます。その結果、貿易収支（＝輸出額－輸入額）は減少します。円高になると貿易収支の黒字は減るわけです。いま、もし輸出も輸入もほとんど変化しないならば、円高になっても貿易収支は変化しません。つまり、円高が貿易収支を変化させるかどうかは、円高による輸出輸入の反応度合いに何らかの条件が必要ではないかと推測されます。それが「マーシャル＝ラーナー条件」といわれる条件です。具体的には「為替相場が1%変動するとき、輸出額の変化と輸入額の変化の合計が1%より大きくなること」、つまりその条件が満たされるときに初めて貿易収支は予想通り変化する、という命題です。しかし、それはより一般的な状況で導かれる条件の一つの特殊ケースに過ぎず、さらに、貿易収支をドルで見るか、円で見るとしてもその条件は異なる、ということをおは日銀時代に発見しました¹⁰。

その証明は、非常に複雑な数式展開を必要としますが、その結果（一般ケース）は図表12に示したように対称性をもつ（ m または $1/m$ を含んだ）美しい式になることがわかったのです。つまりマーシャル＝ラーナー条件には一般的な形（下式）があり、従来のマーシャル＝ラーナー条件（上式）はその一つの特例であったわけですね。真理は美しいことを実感しました。

図表12 マーシャル＝ラーナー条件とその一般化

	円ベース貿易収支	ドルベース貿易収支
・マーシャル＝ラーナー条件	$\alpha + \beta > 1$	$\alpha + \beta > 1$
・一般ケース	$m\alpha + \beta > 1$	$\alpha + (1/m)\beta > 1$

α : 輸出の価格弾力性 β : 輸入の価格弾力性
 m : 輸出額対輸入額の比率

一般には $m \neq 1$ 。しかし $m=1$ の場合（輸出額＝輸入額という特殊ケース）には、下記2式は上記の式（ML条件）と同じ結果になる。つまり下記が一般ケース、上記はその特殊ケース。

¹⁰ この論文は長年、日銀の内部資料にとどめていたが、その後これは重要な理論的発見であると感じたので7年前に岡部（2011b）として日本経済学会で発表、その際に指定討論者の役割を担っていただいた若杉隆平教授（京都大学）から評価していただいた。なお、このような一般化は国際的にみてもまだ知られていないので、英文でも発表したいと考えているがまだ実現していない。

余談ですが、このことを私は30年前の日銀時代に証明し、当時役員会議にも報告しました。そして結果的には、日本の貿易統計の作り方を変更することにまで発展しました。それまでは、日本の国際収支は何億ドルの赤字、黒字と言っていましたが、ドル表示ではある種の歪みをもつことがこの証明の過程で明らかになったからです。このため1987年以降、日本の国際収支はドル表示と円表示で併記されることになり、1996年以降は円表示に一本化（ドル表示は廃止）され現在に至っています。

さらに三つ目の例として、経済理論のなかで最も見事な定理である「厚生経済学の基本定理」、あるいはその別表現ともいえる線形経済学の「双対定理」(duality theorem)も美しさの代表として挙げておきたいと思います¹¹。一定の前提のもとに成立するこれらの命題は、企業が利潤最大化行動をすることは、社会的にみると実は一定の産出物を得るために投入を最小化するという課題（効率最大化）を、その裏側で、かつ同時に社会システム全体として解いていることを示すものになっているのです。

さて、重要な基準としての「美しさ」のいま一つの側面は「無駄のないこと」、あるいは「機能的であること」ではないでしょうか。無駄がないことは美しく、また機能的であることは美しい。このことは、各種建築物やモーツアルトの音楽を想起すれば納得できると思いますが（[図表 13](#)、[図表 14](#)）、大学教育に即していうと、学生諸君が書く論文の冒頭に付ける「概要」(abstract; synopsis)もその事例に該当します。

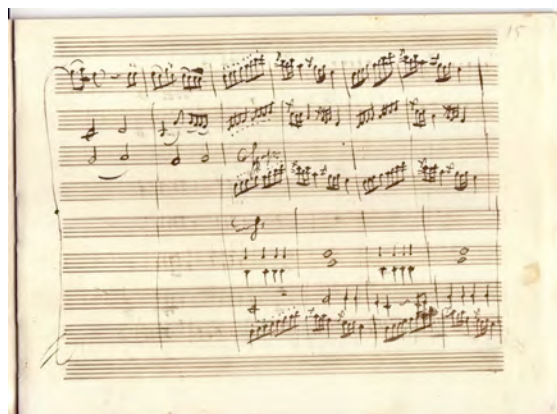
図表 13

機能的で美しい国立代々木競技場



図表 14

流麗な筆致のモーツアルト自筆楽譜



¹¹ 後者については、岡部（2007：第10章付論10-2）、303-311ページを参照。

私は岡部ゼミナール所属の学生諸君に対して毎学期タームペーパーの作成を求めてきたことは前回述べましたが、その論文に良い「概要」を付ける訓練も徹底的に行ってきました。概要は論文の“顔”です。そしてそこには定型化されたパターンがあり、問題の位置づけ、先行研究の問題点の指摘、当該論文の分析手法、主な結論（そして政策的含意）が明確に記載されなければならない（**図表 15**）からです。その見本として前述「マーシャル＝ラーナー条件」論文の冒頭に掲げた「概要」を示すと**図表 16**のようになります。

図表 15
良い「概要」の条件

<p>■論文冒頭に付ける「概要」：次を含む必要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題の位置づけ ・先行研究の問題点指摘 ・当該論文の分析手法 ・主な結論（政策的含意）

図表 16
見本（マーシャル＝ラーナー条件の論文）

<p>【概要】</p> <p>為替相場の変動が貿易収支を所期の方向に変化させるには、輸出入の価格弾力性が一定の条件（マーシャル＝ラーナー条件）を満たす必要があることが従来から知られている。しかし、その条件は比較的強い前提があってはじめて適用可能なものであるにもかかわらず、従来の研究や政策論議ではその点に十分な配慮がなされていない。本稿では、より一般的な環境を前提にしたモデルを設定してその問題を分析した。その結果（一）従来のマーシャル＝ラーナー条件を一つの特殊ケースとして含む一般化されたマーシャル＝ラーナー条件を理論的に導出できること、（二）短期的には長期的効果と逆の効果を持つ現象（いわゆるJカーブ効果）もこのモデルによって導出できること、を示した。そしてそれらの結果は（三）日本のかつての円高局面の現実を整合的に説明できること、（四）政策的にも意義深いこと（国際収支は自国通貨建てで表示するのが適当である）、などを主張した。</p>
--

論文の冒頭に良い「概要」を書くことをことさら重視したのは、それは普遍的な知的力量の一つであるからです。ビジネスの世界においても、会社役員あるいは第三者に対して、ことがらや判断を的確に伝達するエグゼクティブ・サマリー（executive summary）が重要なものと同じです。それは、複雑なこと、難しいことを分かり易く伝える技量だからです。「難しいことを難しく言うのは、易しい。難しいことを易しく言うのは、難しい」ということを私は日銀時代に徹底的に叩きこまれ、それに対応するうえで「概要」の大切さとそのスキルを仕込まれました。ありがたい経験でした。

それに類することですが、明快な整理の仕方として日銀内で重視されていた「三点集約法」もその一つです。例えば「今月の鉱工業生産が減少したのは、三つの要因によるものです。第一に・・・」という風に整理すれば、聞き手や読み手にとって理解しやすく、また頭に入りやすいわけです。

論文をきちんと書くこと、その概要がきちんと書けること、さらに第三者に対して書面あるいは口頭で的確に伝達することは、まさに普遍性のあるスキルであり、

それを大学時代にしっかり身につけることが必要なのです。

実地体験による技能体得

大学教育の具体的側面として第二に指摘したいのは、各種の知的技能は学生が実地 (hands-on) 体験を重ねることによって初めて身についたものになる、という点です。大学において、幅広い、高度な、そして体系的な知識を身につけるうえでは、確かに「講義」形式が最も適しています。その一方、大学教育の三目標のうち、特に「ことばの力」は学問的営為 (論文の執筆、発表、討論等) を自ら体験することを通して修得する以外にありません。それによってしか修得できないのです。それは丁度、自動車の運転やピアノの演奏においては、理屈だけわかっていても十分でないのと同じです。鍛錬して身に付けることが何よりも重要です。そのためにはゼミナール等少人数での密接な学びが必須であり、これには伝統的に各種の方式があります。それを類型化して代表的な三例をみると次のとおりです。

一つ目は、オックスフォード大学の「チュートリアル」(tutorial: 個別指導による大学教育) です。これは、同大学の教育の根幹をなす特有の方式であり、学生は毎週、指導教員が指示する文献を読んだうえで報告書を書き、それを教員と討議する制度です。同大学では通常の授業 (講義) は別途存在しますが、そこへ履修登録する制度はなく、また出席義務もありません。個別指導を中心とする驚くべき制度です。

二つ目は、プリンストン大学の「プリセプト」(precept: 少人数グループ討議の制度) です。同大学の人文・社会科学系の授業は、一般に週2回の講義と週1回のプリセプトで構成されており、全ての授業でプリセプトが必須になっています。各プリセプトは学生15名以下であり、そこでの指導は教員または大学院生が行います。そこでは、要約するスキル、応用するスキル、統合するスキル、判断するスキルを身につけることが目標とされており、対話によって理解を深める「ソクラテス方式」で運用されます。つまり討議では、相手を打ち負かすことではなく、論点を皆で深めること (challenge ideas, not people) を狙いとしているのです。そしてこのプリセプトは、全体としてよく機能していると評価されています¹²。なお大学院の授業は別方式です。

¹² 岡部 (2005) 11-16 ページ。

三つ目は、日本の多くの大学（慶応大、明治学院大ほか）における「ゼミナール」です（研究会と称する場合もあります）。その少人数クラスでは、テキストや論文の輪読、討議が行われるほか、多くの場合、レポートやタームペーパーの執筆が義務づけられています。私は、ゼミで基本文献の輪読を行うほか、前述したとおり小規模ながら学術論文の形式を取ったタームペーパー（学期論文）の執筆を全員に義務付けてそれを特に重視するとともに、効果的な「論文概要」を書かせる訓練を徹底的に行いました。

2. 豊かな大学教育を実現するための制度

以上、少人数クラスの類型をみましたが、それを含め大学における教育システム全体のあり方を次に考えてみます。

（1）大学教育の制度は多様な方式が存在

私の国内外における三つの大学での経験をもとにしつつ、その教育方式を整理すると、**図表 17**のような類型的な理解ができるかと思います。

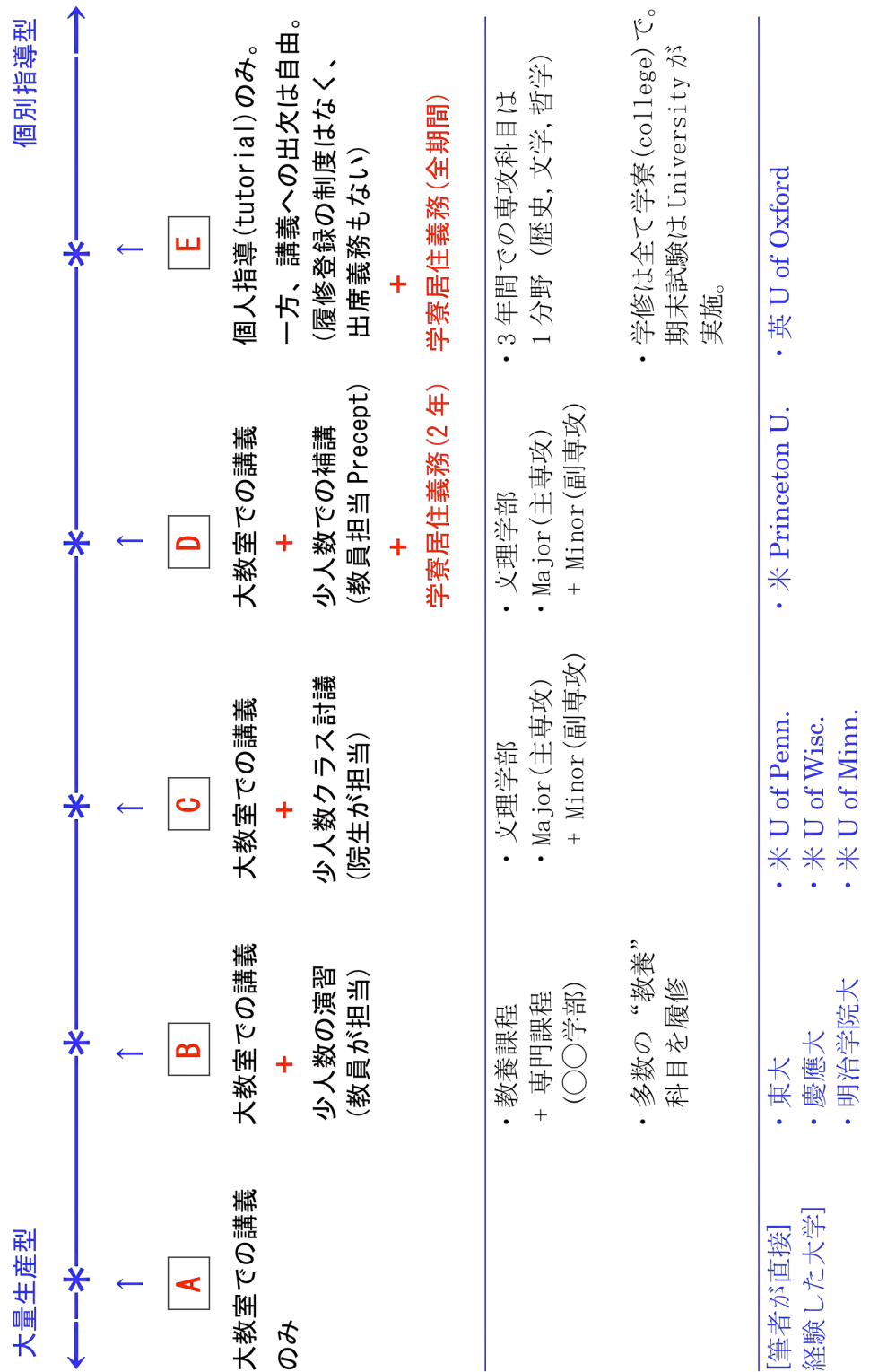
すなわち、左端は大教室での講義だけによる大量生産（マスプロ）方式の教育になります（図では**A型**と表示）。これに対して右端（**E型**）は、学生の個別指導だけによる方式であり、この二つが両極端になります。そしてその中間に3種のバリエーション（**B型**、**C型**、**D型**）を位置づけることができます。

すなわち、**A型**を除きいずれの場合でも大学では「講義＋少人数授業（ゼミ、演習、プリセプト、チュートリアル）」という組合せが最も一般的なタイプになっているといえます。但し、オックスフォード大学はチュートリアルを教育の中核として位置づけており、講義履修を義務付けていない点で例外的です。また一部には、学寮居住を義務づけている場合もあり（**D型**および**E型**）、プリンストン大学では最初の2年間のみを、一方オックスフォードでは在学全期間をそれぞれ、その対象としています。

（2）オックスフォード大学のユニークさ

以上では各国の大学を並列させて考えてきました。しかし、オックスフォード大学だけは、われわれ日本人がイメージする大学とは非常に異なる存在です。日本に

図表 17 大学における教育方法の類型



は、この大学に相当する大学はありません。幸い私はオックスフォード大学に 2001 年に半年滞在する機会があり、興味深い同大学の実体をかなりていねいに調査したので¹³、そのユニークさを若干お話してみます。

オックスフォード大学は、不思議な、ある意味で奇妙な大学です。まずオックスフォードの市街は、学寮（カレッジ）の建物を含め 800 年余りにわたる西洋建築史が封じ込められたタイムカプセルを覗き見るといった感じがします（[図表 18](#)）。

[図表 18](#)

[図表 19](#)

[オックスフォード大学は西洋史の集積体](#) [オールソウルズ・カレッジの「象牙の塔」](#)



色々珍しいことだらけです。例えば、オールソウルズ・カレッジでは、空に突き抜けている 2 本の白い塔があり、それが象牙のような印象を与えるので、そこから大学は色々な意味（とくに日常生活から隔離したことを研究する場所という意味）が込められて「象牙の塔」(ivory tower) と一般に表現されることになりました（[図表 19](#)）。また、学寮（カレッジ）は学生にとって学修の場であるだけでなく、文字通り「寮」（住居）であり、そして食堂であり、学生生活すべての中心になっています。食事に際しては、学生はホールの平の間で食べますが、教員は一段上のハイテーブルで食べるという身分制も残っています。そして食事の始めには、学長がラテン語で祈るという伝統も健在です。

[College が構成する「連邦」として University が存在](#)

オックスフォード大学の一番目の特徴は、学生の入学選抜・教育・居住は、独立したカレッジ（College：300～400 人が居住する学寮、市内に 30 余り存在）がそれ

¹³ その概要は、岡部（2001）を参照。

ぞれ実施し、大学 (University) はある側面でそれらを統合する中央組織として存在する点です。つまり、様々な「カレッジ」が集合して「大学」という一つの連合体ないし「連邦」(federation)を形成しているという理解が可能です。形態的には、かつてのソ連邦や現在の EU と類似しているわけです。それ以上の細かい制度的なことを大学の当事者に質問しても「それはよくわからない。伝統でそのようになっている」ということが少なくなかったのに驚きました。

カレッジの例を幾つか挙げますと、マートン・カレッジは皇太子殿下が、またベイリオール・カレッジは雅子さまが、それぞれ留学されていました。ニュー・カレッジという名称のカレッジもありますが、その設立は何と 1379 年の古いカレッジです。私が半年間滞在したセントアントニーズ・カレッジは、大学院生だけが在籍する点でユニークなカレッジでした (図表 20)。このカレッジは、かつて修道院だった建物を継承して 1950 年に設立された新顔カレッジです。またカレッジという名称の付かないカレッジ (クライストチャーチ) もある、といった具合です。

図表 20 筆者が滞在した
St Antony's College (1950 年創設)



図表 21
学期末試験はガウンを着用して受験



オックスフォード大学は、独特の教育理念とそのための制度 (前述したチュートリアル制度) を堅持しています。そして大学としては、学生の自主性、文章力、討議能力、感性といった総合的な知性と判断力を向上させることに重点を置いており、このため全体的に人文系の領域を重視しています。

そしていかにもイギリスらしく歴史を重んじる伝統があります。例えば、各カレッジの学長 (米国でいう Dean) の名称は、歴史的経緯があるのでカレッジ毎に多様です。その名称として Dean のほか、Warden, Master, Principal, President, Rector,

Provost と 7 種類もありますが、統一しようという話は一切出ていません。不思議なところですが。また学部学生は、卒業試験を受ける時にガウンの着用が義務付けられています (図表 21)。そして卒業試験が実施される建物は、それだけに使われる専用の建物 (Examination School) を設けてそこで行われる、といった具合です。

オックスフォード大学に滞在中、私は二つのことに専念しました。一つは、この大学は興味深い点が多いので、その実体をできる限り調べることです。もう一つは、それまで日本で研究を進めてきた「株式持ち合い」についての研究結果を取りまとめて 1 冊の本にすることでした。しかしその本は、結果的に 2 冊になりました (図表 22)。なぜなら、書物の原稿をまず一気に書き上げることを優先したため、出来上がった原稿は日本語の文章と英語の文章が入り混じったものになり、それなら英語版と日本語版の両方を作ろうと決めて 2 冊¹⁴にすることにしたからです。

図表 22 オックスフォード大学滞在中に執筆した書物 (英語版と日本語版)



オックスフォード大学は単に古いだけではなく、時代の先端を行こうという精神にも富んでいます。例えば、大学図書館の蔵書 (600 万冊) のうちその中核部分 (1920 年以降の蔵書) は、早い時期から全てオンライン検索を可能にし、私が滞在していた 2001 年時点でそれを完成しています。当時、日本の国会図書館の検索オンライン化の実体をはるかに凌いでいました。

余談ですが、半分冗談のつもりでこの大学の図書館における私の著作の有無を試しに名前を入れてウェブ検索したところ、予想もしていなかったことですが、ここには私の英文著書や英文モノグラフ (主として豪州時代に執筆したもの) がその当時、合計 6 点も所蔵されていることを発見、その収集力と整理力の高さに驚きまし

¹⁴ 岡部 (2002a) および Okabe (2002)。

た。ちなみに、このシステムは外部（日本）からも検索できるので、数日前に再び検索してみました。すると、私がその後に刊行した著書や論文など、日本語のものも含めて現在は、かつての2倍の12点にも増えていたので改めて驚いた次第です。

むろん、オックスフォードにも幾つかの課題があります。例えば、チュートリアルと講義の連繋不足、カリキュラムの合理的な組み立てという視点の欠如、などです。この点はプリンストンが勝っていると思います。では、大学教育の制度としてみると、前述した5つの類型（図表17）のうち、果たしてどのタイプがベストでしょうか。大学の世界ランキングでは、オックスフォードが世界一の評価を獲得しています（図表23）。しかし、もし私がいま18歳であり世界のどの大学でも良いから入学したい大学名を挙げなさいといわれれば、プリンストン大学を選択したいと思っています。

（3）なぜプリンストン大学が「ベスト」なのか

私見ではプリンストン大学が世界のザ・ベスト大学ですが、その理由として8つ挙げるすることができます。

1) 米国の大学ランキングでトップ（図表24）。米国内でもっとも頻繁に引用される *U.S. News and World Report* 誌による米国大学ランキング¹⁵では、ほぼ恒常的にトップの座を占めていることです（時にはハーバード大学と同点首位になることもあります）。














2) 学部教育に重点があること。プリンストンはまず研究面で世界トップ級です。これまでにノーベル賞受賞者を26名出しており、現役教員としてもノーベル賞受賞者が9人在籍しています¹⁶。米国主要大学のほとんどが大学院に重点を置いているのに対して、プリンストンは学部教育こそ大学の使命であるという理念を堅持して

¹⁵ このランキングは、7項目の加重合計値による総合点をもとにしている(*U.S. News & World Report, Best Colleges 2018 Edition*, 67 ページ)。評価項目とウエイトは下記のとおり。



1. 卒業比率（卒業できた学生の割合）、	22.5%
2. 大学関係者（多くの大学の学長や進学カウンセラー）による評価、	22.5
3. 教授陣の充実度、	20.0
4. 入学難易度、	12.5
5. 財務基盤の充実度、	10.0
6. 卒業を支援する制度の充実度、	7.5
7. 卒業生による大学への寄付の実体（＝在学満足度の代理変数）	5.0
総合評価	100.0

¹⁶ <https://www.princeton.edu/meet-princeton/facts-figures>
https://pr.princeton.edu/home/02/0814_nobel/hmcap.html

図表 23 Times Higher Education (英)による世界の大学ランキング

1	University of Oxford	(英)	
2	University of Cambridge	(英)	
3	Stanford University	(米)	
4	Massachusetts Institute of Technology	(米)	
5	California Institute of Technology	(米)	
6	Harvard University	(米)	
7	Princeton University	(米)	
8	Yale University	(米)	
9	Imperial College London	(英)	
10	University of Chicago	(米)	
11	ETH Zurich	(スイ)	
12	Johns Hopkins University	(米)	
12	University of Pennsylvania	(米)	 
14	University College London	(英)	
15	University of California, Berkeley	(米)	
16	Columbia University	(米)	
17	University of California, Los Angeles	(米)	
18	Duke University	(米)	
19	Cornell University	(米)	
20	University of Michigan	(米)	
~~~~~			
22	Tsinghua University	(中国)	
23	National University of Singapore	(シンガポール)	
31	Peking University	(中国)	
36	University of Hong Kong	(香港)	
42	The University of Tokyo	(日本)	
43	University of Wisconsin	(米)	
49	Australian National University	(豪)	
42	Kyoyto University	(日本)	
71	University of Minnesota	(米)	
96	University New South Wales	(豪)	
~~~~~			
201-250	Macquarie University	(豪)	
601-800	Keio University	(日本)	
—	Meijigakuin University	(日本)	
~~~~~			

(出典) <https://www.timeshighereducation.com/> (2019年版として2018年9月26日に公表)

(注)  = 筆者が、教授、客員教授、客員講師、客員研究員として在籍経験のある大学。(青色表示)  
 = 筆者が、学生して在籍経験のある大学。(青色表示)

図表 24 米国の大学ランキング(上位 50 大学)

Rank	School (State) (*Public)	Overall score
1.	Princeton University (NJ)	100
2.	Harvard University (MA)	98
3.	University of Chicago	96
3.	Yale University (CT)	96
5.	Columbia University (NY)	95
5.	Massachusetts Inst. of Technology	95
5.	Stanford University (CA)	95
8.	University of Pennsylvania	93
9.	Duke University (NC)	92
10.	California Institute of Technology	91
11.	Dartmouth College (NH)	90
11.	Johns Hopkins University (MD)	90
11.	Northwestern University (IL)	90
14.	Brown University (RI)	86
14.	Cornell University (NY)	86
14.	Rice University (TX)	86
14.	Vanderbilt University (TN)	86
18.	University of Notre Dame (IN)	85
18.	Washington University in St. Louis	85
20.	Georgetown University (DC)	80
21.	Emory University (GA)	78
21.	University of California–Berkeley*	78
21.	Univ. of California–Los Angeles*	78
21.	Univ. of Southern California	78
25.	Carnegie Mellon University (PA)	76
25.	University of Virginia*	76
27.	Wake Forest University (NC)	75
28.	University of Michigan–Ann Arbor*	74
29.	Tufts University (MA)	72
30.	New York University	71
30.	U. of North Carolina–Chapel Hill*	71
32.	Boston College	70
32.	College of William & Mary (VA)*	70
34.	Brandeis University (MA)	68
34.	Georgia Institute of Technology*	68
34.	University of Rochester (NY)	68
37.	Boston University	67
37.	Case Western Reserve Univ. (OH)	67
37.	Univ. of California–Santa Barbara*	67
40.	Northeastern University (MA)	66
40.	Tulane University (LA)	66
42.	Rensselaer Polytechnic Inst. (NY)	65
42.	University of California–Irvine*	65
42.	Univ. of California–San Diego*	65
42.	University of Florida*	65
46.	Lehigh University (PA)	64
46.	Pepperdine University (CA)	64
46.	University of California–Davis*	64
46.	University of Miami (FL)	64
46.	Univ. of Wisconsin–Madison*	64
46.	Villanova University (PA)	64

(出典) *U.S. News & World Report*, Best Colleges 2018 Edition, 70 ページ。

いる点が素晴らしいというのが私の見方です。前掲した全米大学ランキングで高い評価を得ているのは、学部重視という面を相当大きく反映しているのだと思います。ちなみに学生数は、学部学生が約 4600 名、大学院生が 2000 名と学部学生が圧倒的に多いことにそれが表れています。ノーベル賞級の教員も、学部 1～2 年生向けの授業やプリセプト（ゼミ）をきちんと担当しています。そして学生にインテグリティの大切さを教えこむ制度（試験監督なしで学期末試験を行う honor system：別稿 岡部 2018：16-18 ページ）を 100 年前に導入し、堅持していることも想起しておくべき点です。

3) 中規模大学であり大学コミュニティとして一体感があること。著名大学には規模が巨大な場合が多くみられますが、プリンストンはその中で規模が比較的小さく、教職員と学生の間に一体感があり、またキャンパスにもまとまりがある点が好ましいことです。ちなみに、アイビーリーグ 8 大学¹⁷のうち、学生数の点では（ダートマス・カレッジに次いで）2 番目に小さい大学です。

4) キャンパスの美しさ。緑が豊かな中に、歴史的建物が散在（[図表 25](#)）、そして春は木蓮やハナミズキが綺麗です（[図表 26](#)）。前図（[図表 25](#)）は大学設立当初からあるナッソー・ホールという建物であり（1756 年建築）、当初は教室、図書館、チャペル、学寮、教員寮などがこの建物に置かれていました。現在この建物は歴史的建造物に指定されており、ここには学長室などがあり、大学本部の建物として使われています。そうした歴史的な建物が多い中にモダンな建物もあって全体としてすばらしい景観を呈しています。[図表 27](#) のロバートソン・ホールという白い印象的

[図表 25](#)

[図表 26](#)

[プリンストン大学（1756 年建築の本部）](#)

[春は木蓮やハナミズキが美しい](#)



¹⁷ アイビー・リーグに所属するのは、Brown, Columbia, Cornell, Dartmouth, Harvard, Pennsylvania, Princeton, Yale の 8 大学である。

図表 27

ウッドローウイルソン・スクール



図表 28

担当授業「戦後日本経済発展論」



な建物はウッドローウイルソン・スクールであり、経済学を含む社会科学系の教育・研究拠点です。私が担当した授業の教室もこの建物の中にあり、そこで大学院生に対して講義（週 2 回）と論文指導を行いました（図表 28）。

5) 1～2年次には全寮制を採用。入学当初の 2 年間、学生はキャンパス内にある学生寮で生活することが義務付けられています。これは、同世代の仲間とともに学ぶことがいかに重要であるか、そして在学時の人間関係構築が将来大きな意義を持つことを大学が深く理解しているからです。大学のこうした対応は、後述するように卒業後の愛校心の強さにも端的に表れています。

6) 文化的・芸術的に恵まれた環境。プリンストンは中規模都市ですがニューヨークまで 1 時間、またフィラデルフィアまでも 1 時間でゆくことができ、それらの大都会で世界第一級の芸術や文化に容易に接することが可能です。

7) 生活面での安全性。米国の大都市に立地する大学は生活の安全性の面で問題が多いといわざるをえません。例えばフィラデルフィアでは殺人事件が多く（2017 年における同市での犠牲者は何と 293 人¹⁸⁾、その中心部近くにあるペンシルベニア大学は周囲が「危険地帯」とされています¹⁹⁾。しかしプリンストンではそうした問題がありません。

8) 卒業生の満足度が秀逸。前述した *U.S. News and World Report* 誌には「大学卒業生の母校に対する年間寄付者比率」のランキングも掲載されています。この数

¹⁸⁾ <https://www.phillypolice.com/crime-maps-stats/>

¹⁹⁾ ペンシルベニア大学では、キャンパス内の安全確保のため、学生や教職員が安全担当警官に対して直接または専用電話で依頼すれば、大学キャンパス内の指定場所から指定場所ないし最寄りの駅まで 1 日 24 時間、年間 365 日いつでも担当警官が同行してくれる制度 (Walking Escort Services) を設置している。<<https://www.publicsafety.upenn.edu/about/security-services/walking-escort/>>

字は一般に「在学満足度の代理変数」と理解されており、それを他大学と比較するとプリンストンは全米大学で圧倒的にトップです。プリンストンの卒業生は、同大学に在学したことに極めて高い満足感をもっている（だから卒業後は母校への寄付に積極的である）ことがわかります。

私は、プリンストンで教壇に立ったあとも色々な用事があるため、同大学を訪問する機会が少なからずあります。ある時、プリンストンのキャンパスガイドを務めていたボランティア学生に質問してみました。「この大学が素晴らしいことは良くわかりましたが、問題点は何だと思えますか」と。その女子学生は答えを中々思いつかないという風情であり、かなり間を置いてやっと「学寮居住の1-2年生とそうでない3-4年生の間に分断があること」を挙げました²⁰。これは確かに問題の一つかもしれませんが、逆にいえばそのような小さいことしか思いつかないほどプリンストンは恵まれた大学であることを逆に印象づけられた次第でした。

なお、別途ご紹介したとおり²¹、かつてケネディ大統領も第一希望校はプリンストンであり、この大学に入学したのです。ただし持病が悪化したため地元のハーバード大学に転校、そこを卒業したというのが歴史的な経緯です。

## ジョン・ナッシュ

ここで多少脱線しますが、プリンストン大学と深い関係があるジョン・ナッシュ (John Nash、1928-2015) という人について少しお話しします。それは二つの理由からです。

まず研究者として。ナッシュは、プリンストン大学に70年間在籍した数学者・経済学者であり、3年前に痛ましい交通事故で亡くなりました。彼は「ゲーム理論」への貢献により1994年にノーベル経済学賞を受賞しています。受賞理由は、非協力的ゲームにおいては「均衡」（その後ナッシュ均衡と称される）が存在することを1950年の博士論文で数学的に証明し、これがゲーム理論の基礎を作ったと評価されたからです。その論文「非協力ゲーム」(Non-cooperative games) は、彼が若干23歳の時に書いたもので、たった28ページの非常に短いものです。そのような1本の論文が40年を経てノーベル賞につながるとは、何ということでしょうか。

ナッシュは、まぎれもない天才でした。それを示す一つのエピソードがあります。

---

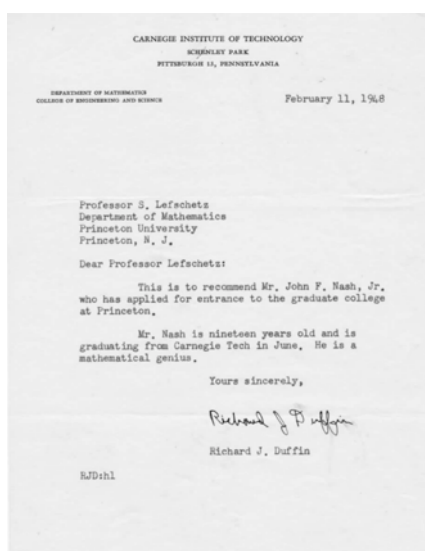
²⁰ 岡部 (2005) 20 ページ。

²¹ 岡部 (2018) 15 ページ。

彼は、学部生として他の大学に在学していましたが、数学の研究を志してプリンストンの大学院を志望したのです。その際に指導教員が書いた推薦状が実に驚くべきものです。ノーベル章受賞後、プリンストン大学がその推薦状をウェブサイトで公開しています²²。その第二パラグラフにはこのように記述されています（**図表 29**）。

「ナッシュ氏は19歳であり、この6月にカーネギー工科大学を卒業する見込みです。彼は数学の天才です。」 たったこれだけです。実質的な推薦のことばは、最後の文章「He is a mathematical genius.」つまりこの5つの単語だけが推薦文という極端にシンプルな推薦状だったのです。

**図表 29** ナッシュを推薦する  
プリンストン大学大学院宛の推薦状



**図表 30** ナッシュの人生を描いた  
映画『ビューティフル・マインド』



ナッシュに言及するもう一つの理由は、『ビューティフル・マインド』という題名で彼の生涯が2002年に映画化されたからです。彼の人生は、実は若いときから統合失調症にさいなまれたものでした。この映画は、彼がその病に苦しみながらも天才数学者として偉業を成し遂げた人生を描いた印象的な作品です。この映画に出てくるナッシュの学生時代の物語は、ほとんどがいまのプリンストン大学において撮影されたものです（**図表 30**）。現在のプリンストン大学のキャンパス風景は、60年前とほとんど変わっていないことができ、大学は時代を超えて存在するものだという感慨をいだかせます。

²² <https://www.vox.com/2015/6/6/8738229/john-nash-recommendation-letter>

### 3. 日本の大学改革を考える場合の課題

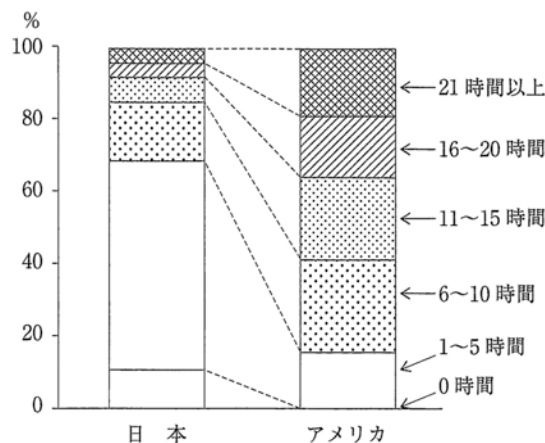
最後に、日本の大学改革を考える場合、避けて通れない大きな課題が突きつけられていることを二つ指摘しておきます。

#### (1) “勉強しない（する必要がない）大学生”

一つは、日本の大学生の学修時間の実情に関するものです。大学教育論の第一人者である金子元久氏（東大名誉教授）が、大学1年生を対象として日米比較調査した結果があります（図表31）。それによれば、日本の大学生は（アメリカの学生に比べて）「勉強しない、あるいはする必要がない」大学生であることが残念ながら明確に示されているのです²³。

アメリカの大学生の場合、1週間の自立的学習時間が0時間～5時間にとどまるのは全体の2割弱ですが、日本の大学生の場合、そうした学生が圧倒的に多く何と全体の7割弱も占めているのです。しかも、1週間に6時間以上学習する学生をみると、アメリカの学生はさらに長時間学習する傾向が強いのに対して、日本では週5時間以上学習する学生であっても学習時間がさして多くないことがわかります。

図表31 授業に関連した自立的学習時間（1週間あたり）  
-大学1年生の日米対比-



(出所) 金子 (2013) 39 ページ。

これは、ショッキングな事実です。なぜ日本の大学生は勉強しないのか。勉強しなくても卒業できるのか。日本の大学は本来求められる機能を果たしていないのではないか。このような根本的な疑問が生じます。

²³ これとほぼ同じ事実が、別の調査結果（文部科学省：2012、配付資料3-2）においても示されている。

一つの理由は、学生も企業も、大学教育の成果（経済学の用語でいえば人的資本の形成）を本当は期待していないからではないか。つまり、学生は「大学時代は授業よりもむしろそれ以外の体験（サークル活動、ボランティア、アルバイト、海外旅行等）をする時代」と位置づけているのではないか。一方企業も「大学は新入社員の一般能力を事前に選抜してくれる仕組み」と捉え、「仕事に必要なとなる技能・知識は採用後に自社研修で対応すれば十分」という感覚ではないのか²⁴。例えば、日本の大学で使われる教科書類は精々200 ページ程度ですが、アメリカの大学では教科書はたいてい500～600 ページの電話帳なみの厚さのものが使われています。学生にたくさん読ませる、たくさん書かせる、という点で雲泥の差があるというのが私の経験的な感想です。これらの実情を踏まえると、日本では教員の専門志向だけが大学の原理になっており、そもそも「大学教育とは何か」という問いがない点こそが日本の大学問題である（絹川 2018：237 ページ）という鋭い指摘もみられます。

上記一つの統計的事実は、日本の大学のあり方に対して根本的な課題を突きつけているといわざるをえません。そもそも大学は何をする場所か、20歳前後の若者だけに、そして単に卒業証書を与えるための場所なのか。それとも、年齢の如何に拘わらず、学問を通して知的スキルを高め人間性を豊かにする場所なのか。もし後者だとすれば、日本人の働き方や学び方、そして新卒採用市場のあり方も大きく変わることにつながる可能性があります。

## （2）大学教育は本来非常に高価なもの

もう一つの大きな問題は、大学教育にかかる本当の費用についての認識です。大学教育に期待するのであれば、それは本来「高くつく」（お金がかかる）という事実を冷静に認識することがまず必要ではないかと思います。その面での意識改革が求められているのではないか。

例えば、授業料と生活費をみると、プリンストン大学（私立）では、年間690万円かかります（授業料520万円、寮費食費170万円）。カルフォルニア大学は、州立なので州内学生は年間345万円（授業料155万円、寮費食費190万円）にとどまりますが、州外学生は同640万円（授業料450万円、寮費食費190万円）かかります²⁵。これに対して日本の場合、慶応大学（私立）や明治学院大学（私立）の授業料は、

²⁴ 荻谷（2012：161-178 ページ）はこうした根本的な問題を提示している。

²⁵ *U.S. News & World Report, Best Colleges 2018 Edition*, 巻末資料。



年間およそ 130～140 万円です（その他に生活費が必要）。大学教育という「高級サービス」を安い授業料によってまかなうことは、経済論理からいって当然限界があります。こうした認識に立った議論も欠かせないと思います。

近年の大学改革は、結局、大学の形式整備ないしビジネス流の結果アプローチを文部科学省が大学側に強制しており、本当の改革に結びつかないものが多いとの懸念が拭えません。例えば(a)「大学院重点化」政策においては〇〇学部教授を大学院〇〇研究科教授と読み替えただけであり、実体はほとんど不変です。(b)国際化を図るために外国人教員を増員するといっても、現実には「外国人」でなく「外国人等」と規定することにより実体的に日本人教員でそれを充足しています²⁶。さらに(c)「今後 10 年間で世界大学ランキングトップ 100 に 10 校以上のランクインを目指す」という文科省の国立大学改革プランではその具体的手立てが準備されているのかどうか不明です。

#### 4. 結論

日本の大学改革を考える場合、上記二つのこと（大学生の学習時間の少なさ、大学教育のコスト認識）だけでも容易に対応できる課題ではありません。また近年は ICT（情報通信技術）発達の恩恵により、従来の大学レベルの知識を得ることが新しい方法によって可能になっています^{27 28}。大学のあり方を考えるにはこうした面からの検討も欠かせません。さらに、より具体的な課題としても、入試改革のあり方（解答を「記述式」にするのはどの程度改善になるのか）、学生の就職活動と学業のあり方（4 年次春学期は学生が就活で欠席するので満足な授業が不可能になっているという実態）、大学教員の事務増嵩による多忙化と疲弊、若手教員にとって不安定な任期付き雇用の拡大など、枚挙に暇がありません。

本稿では、これらの課題に立ち入って論じませんでした。それ以外につき概ね

---

²⁶ 荻谷（2017）59-73 ページ。

²⁷ 例えば、放送大学（The Open University of Japan）がある。これは、文部科学省が生涯学習機関として広く社会人等に大学教育の機会を提供するという趣旨で 1983 年に設置した正規の通信制大学である。そこでの教育は、放送授業、面接授業、オンライン授業、の 3 形態で実施される。卒業には 124 単位が必要（うち 94 単位は放送授業、20 単位は面接授業およびオンライン授業）。学部課程は教養学部のみ（入学試験がなく入学は容易であるが、卒業には厳格なチェック体制がある）。

²⁸ もう一つの例としてムーク（Massive Open Online Course : MOOC）がある。これは、インターネット上で誰もが無料で受講できる大規模な開かれた講義であり、米国等の大学（スタンフォード、MIT など）が提供、条件を満たせば修了証が交付される。日本でも JMOOC がある（2013 年設立の非営利団体。東大、早稲田大、慶応大などが参加）。

次の点を主張しました。

(1) 教養教育やリベラルアーツ教育を議論する場合、そこには多様な解釈（意味）が含まれるが、それらをどのように解釈するにしても、大学教育の目標としては別稿（岡部：2018）で指摘した三点（日本語力、インテグリティ、向上心）が実体的に該当するとみることができる。

(2) 大学教育においては、教員の研究活動がその起動力となる（学生は教員の背中をみて学ぶ）。そのためには「講義＋少人数クラス（ゼミや研究会）」という制度が実効性を持ち、とくに米プリンストン大学における教育の実態に学ぶべき点が多い。

(3) 大学教育においては、単に高級な知識や技能を身につけることにとどまらず、仲間と共に学ぶ環境（人間的きずなの形成）が確保されることが在学時に重要であり、それはその後の学生の人生にとっても大きな価値を持つ。

(4) 日本の大学生の学習時間は、アメリカ等の大学生に比べて著しく少ない。その理由は、大学教育が本来どうあるべきかが日本では正面から問われることがなかったことを反映しているので、いまその根本的な議論が必要である。

以上

## 【引用文献】

猪木武徳（2009）『大学の反省』NTT 出版。

今田高俊（2018）「新しいリベラルアーツを求めて」、山脇直司（編）『教養教育と統合知』東京大学出版会、第2章。

岡部光明（1999）『現代金融の基礎理論－資金仲介・決済・市場情報』日本評論社。

岡部光明（2000）『大学教育とSFC』西田書店。

岡部光明（2001）「大学新旧比較私見－オックスフォードとSFC」東京大学経済学部『経友』202号。〈[http://www.okabem.com/essay/sfc_and_oxford.pdf](http://www.okabem.com/essay/sfc_and_oxford.pdf)〉

岡部光明（2002a）『株式持合と日本型経済システム』、慶應義塾大学出版会。

岡部光明（2002b）『大学生の条件 大学教授の条件』慶應義塾大学出版会。

岡部光明（2005）「米国プリンストン大学における学部教育について：その理念・制度的特徴・SFCへの示唆」、慶應義塾大学湘南藤沢学会 リサーチメモ RM2004-12。

岡部光明（2006）『私の大学教育論』慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2007) 『日本企業とM&A—変貌する金融システムとその評価—』東洋経済新報社。

岡部光明 (2009) 『大学生へのメッセージ—遠く望んで道を拓こう—』(日本図書館協会選定図書) 慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2011a) 『大学院生へのメッセージ—未来創造への挑戦—』慶應義塾大学出版会。

岡部光明 (2011b) 「為替相場の変動と貿易収支：マーシャル＝ラーナー条件の一般化とJ-カーブ効果の統合」明治学院大学『国際学研究』39号。

岡部光明 (2013) 『大学生の品格—プリンストン流の教養24の指針—』日本評論社。

岡部光明 (2018) 「大学教育の目標とその達成(1): 体験論と学問的論拠」、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト。 <<https://meigaku.repo.nii.ac.jp/>>

加藤 寛(1992)『慶応湘南藤沢キャンパスの挑戦—きみたちは未来からの留学生』東洋経済新報社。

金子元久 (2013) 『大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ—』玉川大学出版部。

苅谷剛彦 (2012) 『イギリスの大学・ニッポンの大学—カレッジ、チュートリアル、エリート教育—』中公新書ラクレ430、中央公論新社。

苅谷剛彦 (2017) 『オックスフォードからの警鐘—グローバル化時代の大学論—』中公新書ラクレ587、中央公論新社。

絹川正吉(編著) (2002) 『ICU「リベラル・アーツ」のすべて』(シリーズ教養教育改革ドキュメント2) 東信堂。

絹川正吉 (2018) 『リベラル・アーツの源泉を訪ねて』東信堂。

文部科学省 (2012) 「中央教育審議会、大学分科会(第108回)・大学教育部会(第20回)合同会議」配付資料3-2。

<[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/_icsFiles/afieldfile/2012/07/27/1323908_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/_icsFiles/afieldfile/2012/07/27/1323908_2.pdf)>

山脇直司(編) (2018) 『教養教育と統合知』東京大学出版会。

Kahneman, Daniel (2003) “Maps of Bounded Rationality: Psychology for Behavioral Economics,” *American Economic Review* 93 (5), December, pp.1449-1475.

Okabe, Mitsuaki (2002) *Cross Shareholdings in Japan: A New Unified Perspective of the Economic System* Cheltenham, Glos., UK, and Northampton, Mass., USA: Edward Elgar Publishing.

## [付表] 授業シラバスの例

### 日本経済論 (3202)

明治学院大学 2007/秋学期

月・木 2時限

岡部光明

**学修目標：** 現代日本経済の構造、変動、そして課題を総合的に取り扱うことにより、日本経済に関する体系的理解を得ることを目標とする。それと同時に、初等経済学をうまく活用すること、現状理解だけでなく政策思考を身に付けること、も目指したい。

**講義概要：** まず、戦後 60 年間における日本経済の大きな変遷をたどる。次いで、日本の企業、労働、社会保障、国民生活、地域経済、財政、金融、産業構造など、国内主要領域を順次採り上げてやや詳細に議論する。そして、貿易や国際金融など国際面の特徴を論じ、最後に日本経済の構造変化、少子高齢化といった視点をもとに政策課題を改めて整理する。

テーマは、ミクロ経済とマクロ経済、実体経済と金融、国内問題と国際問題、現状分析と政策課題など多岐にわたるが、最近の学問的成果をできるだけ取り入れつつ領域横断的接近を心がけて講義をする。また、可能な限り国際比較的視点を活用して日本経済の特徴を浮かび上がらせる方針である。

#### 授業計画

- 【第1回】 この授業の狙い、日本経済の概観 (テキスト第1章)
- 【第2回】 日本経済の概観と基本的課題 (第1章)
- 【第3回】 日本経済の歩み (1) : 戦後復興と高度成長期 (第2章)
- 【第4回】 日本経済の歩み (2) : 低成長への屈折 (第2章)
- 【第5回】 日本経済の歩み (3) : バブルとその要因 (第3章)
- 【第6回】 日本経済の歩み (4) : バブル崩壊と長期不況 (第3章)
- 【第7回】 企業 (1) : 日本企業の特徴点 (第4章)
- 【第8回】 企業 (2) : コーポレートガバナンス (第4章)
- 【第9回】 労働 (1) : 日本型雇用システムと課題 (第5章)
- 【第10回】 労働 (2) : 若年者および女性の雇用問題 (第5章)
- 【第11回】 社会保障 (1) : 基本理念と制度 (第6章)
- 【第12回】 社会保障 (2) : 医療と公的年金 (第6章)
- 【第13回】 格差問題 (1) : 生活格差と課題
- 【第14回】 格差問題 (2) : 地域格差と課題 (第12章)
- 【第15回】 財政 (1) : 仕組みと役割 (第7章)
- 【第16回】 財政 (2) : 財政赤字問題と制度の見直し (第7章)
- 【第17回】 金融 (1) : 金融システムの役割と課題 (第8章)
- 【第18回】 金融 (2) : 日本の物価問題と金融政策 (第8章)

- 【第19回】 産業（1）：産業構造の変化と技術革新
- 【第20回】 産業（2）：日本農業の特徴と政策課題（第10章）
- 【第21回】 国際経済（1）：日本の貿易および直接投資の特徴（第9章）
- 【第22回】 国際経済（2）：貿易摩擦と自由貿易地域構想（第9章）
- 【第23回】 対外金融取引（1）：円相場の歴史とその背景（第11章）
- 【第24回】 対外金融取引（2）：円は国際通貨になりうるか（第11章）
- 【第25回】 まとめ（1）：日本経済の構造変化と課題
- 【第26回】 まとめ（2）：少子高齢化社会の課題
- 【第27回】 期末試験

**授業に向けての準備・アドバイス：** 受講を意味のあるものにするには（1）毎回の講義に必ず出席すること、（2）教科書の指定範囲を毎週遅れずに読むこと、が決定的に重要である。継続は力なり。授業は基本的に講義形式を取るが、できればインターアクティブ（質疑応答）形式も一部活用したい。

**教科書：** 浅子和美・篠原総一（編）『入門・日本経済（第3版）』有斐閣、2006年。この書物は中級レベルであるが日本経済の全体像を的確に描き出している。授業では、ほぼ毎回、図表等のプリントを1枚配付する。

**参考書：**

1. 小峰隆夫（2006）『ビジュアル 日本経済の基本』日経文庫 [初級]
2. 岡部光明（2002）『株式持合と日本型経済システム』慶應出版 [中級]
3. 岡部光明（2007）『日本企業と M&A』東洋経済 [上級]
4. 岡部光明（2002）『大学生の条件 大学教授の条件』慶應出版
5. 岡部光明（2006）『私の大学教育論』慶應出版

**成績評価の基準：** 期末試験（70%）、出席点または小レポート（30%）、の合計で評価する。

**担当者 URL：** <http://www.okabem.com/>

**備考：** （1）授業中の食事（飲み物を除く）は、社会通念に合致しないうえ他の受講者の迷惑になるので認めない。（2）私語が目立つ者は名指しをして退室を命じることがある。（3）教室内では帽子をとること。大学教育のあり方、学生の心構えなどを記した上記の書物4および5を希望者の贈呈する（オフィスアワーに来訪されたい）。

なお、担当者は、これまで日本銀行において調査研究を行ったほか、米国ペンシルベニア大学、プリンストン大学などで同様の授業科目を担当したことがある。

**オフィスアワー・研究室：** 火曜日 12：25-13：25。8号館 8418号。